

赤い船

小川未明

青空文庫

露子は、貧しい家に生まれました。村の小学校へ上がったとき、オルガンの音を聞いて、世の中には、こんないい音のするものがあるかと驚きました。それ以前には、こんないい音を聞いたことがなかったのです。

露子は、生まれつき音楽が好きとみえまして、先生が鳴らしたオルガンの音を聞きますと、身がふるいたつように思いました。そして、こんないい音のする器械は、だれが発明して、どこの国から、はじめてきたのだろうかと考えました。

ある日、露子は、先生に向かつて、オルガンはどこの国からきたのでしょうか、と問いました。すると先生は、そのはじめは、外国からきたのだといわれました。外国という、どこでしようかと考えながら聞きますと、あの広い広い太平洋の波を越えて、そのあちらにある国からきたのだと先生はいわれました。

そのとき、露子は、いうにいわれぬ懐かしい、遠い感じがしまして、このいい音のするオルガンは船に乗ってきたのかと思いました。それからというもの、なんとなく、オルガ

ンの音を聞きますと、広い、広い海のかなたの外国を考えたのであります。

なんでも、いろいろと先生に聞いてみると、その国は、もつとも開けて、このほかに
もい音のする楽器がたくさんあつて、その国にはまた、よくその楽器を鳴らす、美しい
人がいるということである。で、露子は、そんな国へいつてみたいものだ。どんなに開
ている美しい国であろうか。どんなに美しい人のいるところであろうか。そしてその国に
いくと、いたるところでいい音楽が聞かれるのだと思ひました。それで露子は大きくな
つたら、できるものなら、外国へいつて音楽を習つてきたいと思ひました。露子の家
は貧しかったものですから、いろいろ子細あつて、露子が十一のとき、村を出て、東
京のある家へまいることになりました。

二

その家はりっぱな家で、オルガンのほかにピアノや蓄音機などがありました。露子は、
なにを見ても、まだ名まえすら知らない珍しいものばかりでありました。そしてそのピ
アの音を聞いたり、蓄音機に入つてゐる西洋の歌の節など聞きましたとき、これらの

ものも海を越えて、遠い遠いあちらの国からきたのだらうかと考えたのであります。昔、
 村の小学校時代にオルガンを見て、懐かしく思ったように、やはり懐かしい、遠い、
 感じがしたのであります。

その家には、ちようど露子の姉さんに当たるくらいのお方がありまして、よく露子をあ
 われみ、かわいがられましたから、露子は真の姉さんとも思つて、つねにお姉さま、お姉
 さまといつて懐きました。

よく露子は、お姉さまにつれられて、銀座の街を歩きました。そして、そのとき、美
 い店の前に立つて、ガラス張りの中に幾つも並んでいるオルガンや、ピアノや、マンドリ
 ンなどを見ましたとき、

「お姉さま、この楽器は、みんな外国からきましたのですか。」
 と問いました。お姉さまは、

「ああ、日本でできたのもあるのよ。」
 といわれました。

露子の目には、それらの楽器は黙つているのですが、ひとつひとつ、いい、奇しい妙な、
 音色をたてて、震えているように見えたのであります。そして、晩方など、入り日の紅

くさしこむ窓の下で、お姉さまがピアノをお弾きなさるとき、露子は、じつとそのそばにたたずんで、いちいち手の動くのから、日の光がピアノに当たって反射しているのから、なにからなにもで見落とすことがなく、また歌いなされる声や、かすかにふるえる音のひとつひとつまで聞きのことになかったのであります。

露子にはピアノの音が、大海原を渡る風の音と聞こえたり、岸辺に打ち寄せる波の音と聞こえたのであります。そして、ピアノをお弾きなさるお姉さまが、すきとおるお声で、外国の歌をうたいなさるお姿は、いつもよりかいつそう神々しく見えたのであります。水晶のようなお目は星のごとく輝いて、涙が浮かんでいたものであります。

露子は、自分の母さまや、父さまのことを思い出し、また村の小学校のことなどを思い出して、いつしか熱い涙が、ほおを流れたのであります。

三

露子は、おりおり、自分が船に乗って外国へいったような夢を見ました。そして、外国でオルガンを習ったり、ピアノを聞いたりして、たいそう自分が音楽が上手にな

つて、人々からほめられたような夢を見ておおいに喜ぶと、夢がさめて驚いたことがありました。

* * * * *

初夏のある日のこと、露子は、お姉さまといっしょに海辺へ遊びにまいりました。その日は風もなく、波も穏やかな日であったから、沖のあなたはかすんで、はるばると地平線が茫然と夢のようになって見えました。白い雲が浮かんでいるのが、島影のようにも、飛んでいる鳥影のようにも見えたのであります。

お姉さまは、いい声でうたいながら、露子の手をとってお歩きになりますと、露子も、きれいな砂を踏んで波打ちぎわを歩きました。波は、かわいらしい声をたてて笑った。このとき、沖のはるかに、赤い筋の入った一そこの大きな汽船が、波を上げて通り過ぎるのが見えました。露子は、ふと、この汽船は遠くの遠くへいくのではないかと思つて見えますと、お姉さまも、またじつとその船をぐらんになりました。

「お姉さま、この海はなんという海なのでしょう。」
 「お姉さま、この海が太平洋というのですよ。」とお教えくださいましたので、この海をどこまでもいけば外国へいかれるのだらうと思ひました。

「あの、赤い船は外国へいくのでしようか。」

と、露子はお姉さまに問いました。するとお姉さまは、いつもじつとものをごろんになるとき目に涙を浮かべられますが、やはり目に涙をたたえて、

「そうねえ。」

といつて、暫時、頭をおかしげになつていましたが、

「ああ、きつと外国へいくんでしようよ。」

と、やさしくいわれました。

「幾日ばかりかからなければ、外国へいかれませんの。」

と、露子は聞きました。

「幾日も、幾日もかからなければ、外国へはいかれません。幾千マイルという遠くへい

くんですもの。」

と、お姉さまはいわれました。

そう思うと、なんとなくあの赤い船が懐かしいのであります。あの赤い船は太平洋を渡つて、美しい国へいくのかと思ひますと、あの赤い船にどんな人が乗つていて、なにを
しているかと考えました。けれど遠くへだたつていますので、ただ赤い筋と、ひらひらひ

るがえつてゐる旗と、太い煙突と、その煙突から上る黒い煙と、高い三本のほぼしらとが見えたばかりであります。そして船の過ぎる跡には白い波があわだつてゐるばかりであります。

露子は、どうしてもその赤い船の姿を忘れることができませぬ。自分も、その船に乗つて外国へいつてみたい。そして、オルガンやピアノや、いい音楽を聞いたり、習つたりしたいものだと思へました。見るうちに赤い船は、だんだん遠ざかつてしまつた。日は漸々西に傾いて、波の上が黄金色に輝いて、あちらの岩影が赤く光つた時分には、もうその船の姿は波の中に隠れて、煙が一筋、空に残つていたばかりです。

その日は、お姉さまといつしよに海辺で遊び暮らして、疲れた足をひきずつて家に帰りました。

四

明くる日、露子は窓によつて、赤い船はいまごろどこを航海していかと思つて、ますます、ちようどそこへ一羽のつばめが、どこからともなく飛んできました。

露子は、つばめに向かつて、

「おまえは、どこからきたの。」

と聞きますと、つばめは、かわいらしくびをかしげて、露子をじっと見ていましたが、
「私は、南の方の海を渡つて、はるばると飛んできました。」
と答えました。

「そんなら、太平洋を越えてきたの？」

と、露子の顔には覚えが笑みがあふれたのであります。つばめは、

「それは幾日となく、太平洋の波の上を飛んできました。」
と答えました。

「そんなら、おまえは船を見なくて？ ……」

と、露子は聞きました。

すると、つばめは、

「それは、毎日毎日幾そうとなく船を見ました。あなたのお聞きになります船は、どんな船ですか。」
と問い返しました。

露子はつばめに、その船は赤い筋の入った船で、三本の高いほぼしらがあることから、自分の見た記憶のままを、いちいち語り聞かせたのであります。

すると、つばめは、またくびをかしげて、この話を聞いていましたが、

「その船なら、私はよく知っています。私が長い旅に疲れて、暮れ方、翼を休めるため、海の上に止まる船のほぼしらを探していましたとき、ちょうどその赤い船が、波を上げて太平洋を航海していましたから、さつそく、その船のほぼしらに止まりました。ほんとうにその晩はいいお月夜で、青い波の上が輝きわたって、空は昼間のように明るくて、静かでありました。そして、その赤い船の甲板では、いい音楽の音がして、人々が楽しく打ち群れているのが見えました。」

と語り聞かして、つばめは、またどこへか飛び去ってしまいました。

露子は、いまごろはその船は、どこを航海しているだろうかと考えながら、しばしばめのゆくえを見守りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い船

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>